

■ 亀居城「妙見丸」跡

この城山の丘は、築城時、北極星あるいは北斗七星を神格化した妙見菩薩からつけ「妙見丸」と名付けられました。昔は、この山のふもとまでが海で、海上を一望できたため、重要な戦略拠点として位置付けられました。



一方、小方村の巖神社は、応安2年(1369)の棟札から推測すると、すでに650年もの昔から存在しこの地域一帯を「小方郷」と言い、阿多田島や小瀬川沿線までが氏神信仰の中心となっていました。関ヶ原の戦い後、福島正則の支城の一角として、海に向かっての要塞と鎮守の神として崇められ、例祭には、城主自ら参拝され幣帛料を奉納したといわれています。境内には、安芸の宮島の大鳥居と同じ、市域最大の石造り「両部鳥居」があります。

参道の石段を登りつめた所にある狛犬は、市内24の氏神社の中で阿多田嶋神社と共に「阿・畔」が逆になっています。

■ 城六兵衛君神霊之碑

幕末第二次長州の役では、広島藩は中立の立場でしたが、慶応2年(1866)6月14日、長州軍により大竹・小方・そして玖波の町並みが焼き払われました。

広島藩佐伯郡役所は翌15日、山田喜和馬に命じて、郡衙徒士ら4人で小舟をこぎ出し、被災状況調査のため、玖波沖に差し掛かったところ、長州軍に見つかり、船首にいた城六兵衛が「我ら芸藩の役人じゃ、銃を納めて下されい」と叫んだが、長州軍の銃声は止まず、「城六兵衛」は無念にも胸板を撃ち抜かれ倒れました。この事件に対し長州方は詫言を入れ、巖神社境内に永く「木碑」を立て神霊の供養とすることを約し、156年たった今も続けられています。



■ 亀居城築城犠牲者慰霊碑

その昔、旅の僧侶が小方の里に入り、「この村には、異常なものが漂っている。昔お城を築いたとき、たくさんの犠牲者が出ました、今でも弔う人がなく霊が浮かばれていない。だからこの町は栄えないのだ」と言ってどこへともなく立ち去って行きました。

その後、有志が集まり、ハワイ州の篤志者からの献金や土地の提供者により、輝照凝灰岩(自然石)で、高さ150センチ、横幅120センチのどっしりとした慰霊碑が昭和62年5月に建立されました。



■ 浄土宗西念寺砲弾跡

幕末、西国の若者たちが決起、長く不満の蓄積と諸外国との文明開化の遅れに気づいた日本を、近代化へと大きくかじ取りを図り、高杉晋作・西郷隆盛・坂本龍馬らが倒幕に向けて長州・薩摩を立ち上げさせました。

慶応2年6月14日芸州大竹口の戦は、幕府の攻撃で始まり長州軍も反撃、一進一退の中、8月2日宮島の須屋浦に二隻の幕艦が現れ、小方沖に移動して、長州軍本陣「西念寺」に向かって艦砲射撃を行い、その一発が本堂の梁を支える「肘木」を貫きました。今もそのまま破損の跡を残しています。

また、西念寺本堂東側にあるクスノキは、市域の巨樹の一つで約400年もの樹齢を数えるといわれています。他にも数本のクスノキがあり、西念寺本堂を風雨から守っています。



▲本堂梁を支える「肘木」破損の跡



西念寺本堂東側の樹齢400年のクスノキ ▶

亀居公園 城山巡り

福島正則の支城と昭和の復元石垣

亀居城跡

発行 大竹市教育委員会 編集/構成 大竹市歴史研究会



亀居城跡の歴史

亀居公園がある大竹市は、広島県の南西部に位置し、一級河川小瀬川を挟み山口県との県境に接しています。中世戦国時代末期から近世初頭にかけて、歴史は動きはじめ、豊臣秀吉亡き後、西国八か国百二十万石を領していた毛利輝元は石田三成により西軍の盟主まつりあげられて、慶長五年(1600)、覇権争いは頂点に達し、東方徳川家康との「関ヶ原の合戦」で敗軍の将となり、真新しい広島城を追われ、防長二州に滅封されました。天下にその名を知られた豊臣恩顧の武将福島正則は、東軍家康方に与し勲功を挙げ勝利に導き、芸備二州四十九万八千石を拝領して、慶長六年(1601)広島城に七百人の家臣団を引き連れ入城しました。正則は、直ちに領国の検地をおこなうと共に、毛利氏に対する「守りの城」として海に突き出た小方の丘陵地、標高八十八メートルを要害に決め、北は懸崖の山々が連なり、眼下に西国街道と西に苦の坂峠を睨むことから、甥の福島伯耆守正宣に命じ、慶長八年(1603)築城を開始しました。慶長十三年に城は完成しますが、城将福島伯耆守正宣は前年に亡くなっており、雄姿を見ることはできません。本丸に三層の天守閣を構えたと推定され、十一の郭を配した強固な、毛利氏に対する「守りの城」でありましたが、豊臣方に対する温情は消え去らず、大坂冬・夏の陣にも留守居にとどまった正則は、戦功をあげることなく、遂に慶長十六年一國一城令を前に、亀居城破却を命じ廃城となったといわれています。謎に包まれた亀居城が、再び登場したのは、昭和五十二年十一月で、三百七十四年の歳月を要しました。都市公園化工事が進む中、本丸・天守台が姿を現し、刻印・矢穴跡の石垣・瓦その他・遺物が発掘され、更に2カ所の井戸が確認される中で、近世初頭の貴重な城跡であることが判明し、大竹市指定重要文化財「史跡」に指定されました。現在では整備が行き届き、「心癒される散歩道」・「歴史学習」・「健康保持」・そして「植物観察」など、史跡・都市公園として市民の憩いの場となっています。

石をさがして

400年の時を刻む「刻印」

亀居城跡の刻印は、平成2年の初秋、9月から10月にかけて、残暑厳しい中、大竹市歴史研究会が総力を挙げ園内をくまなく調査、拓本におさめ、総数264個、42種類の刻印を確認しました。



築城時の石工たちの「矢穴跡」

亀居城跡の石垣には、石を割った「矢穴跡」の残る石が多く使われています。矢穴跡の幅は、6センチ〜11センチのものも多く、年代を知る上で貴重な石であり、後に鉄の質や石の特性を読む技術などの発達で、現在に近くなるに従い幅が細くなることから、年代を想定できるといわれています。

「慶長8年築城時の石割矢穴跡」

天守台北側に残る「矢穴跡」 大正期、巖神社社殿新築の際、使われた石 天守台西側に残る「矢穴跡」



福島正則らしいお笑いエピソード



亀居城は、瀬戸内海の島々からも石が運ばれ強固な石垣を築いた城であったといわれています。中には牡蠣の殻が付いた石が組み込まれています。これは正則公が「石一個に對し米一俵差出候」とお触れを出したところ石をどっさり積んだ船が小方沖に現れました。しばしコメを振舞いましたが、正則こごとばかり、「もう石は余るほどになったので持ち帰ってくれ」といったので、腹を立てた船頭は、小方の入江に、投げ捨てて帰ったということです。これを見た正則は、「さあ、石を陸揚げして城の石垣を築け」と命じたという。豪快な武将福島正則ならではの話として伝えられています。

四季折々 植物の香り

亀居公園は、植物観賞の宝庫です。公園内は常緑高木種が多く、クログナモチ・ヤマモモ・そしてスタジイなど各郭に力強く育っています。秋を彩る樹木は、ケヤキ・ソメイヨシノ・ナラカシワ・モミジなどの落葉樹も公園内にはあり、四季折々の植物との触れ合いができます。



常緑樹 アラカシ

タコの足のように入土深く根ざしているアラカシが一生懸命生きています。



常緑樹 ヤマモモ 園内各郭に、「ヤマモモ」が十数本成長しています。

春



春には県下でも有数の花見の名所で、多くの市民が訪れます。公園内一周約300メートル、家族で・お友達で大きな樹木の下で楽しむことができます。

秋



行事などの会場となる「二の丸」には、中央にケヤキが人々を包み、高く聳え立っています。